

ORワーカーやSEの養成について

能力開発のある会合で「和波その子；母と子のシンフォニー」という本は、盲人で世界的なヴァイオリニストである和波孝禧さんを育てた母親の手記で、一読に価する、という話を聞いた。私の娘もピアノを専攻したので、さっそく夕食の話題にした。家内も娘もその本は読んだそうで、かなり詳しく覚えていた。私も何となくその本を読んでみたくなったので、家内の本箱から借用し、読ませてもらった。

盲人にヴァイオリンを修得させることは不可能と言われていた。それはヴァイオリンを構える姿勢とか、弓の角度など、それを眼でみながら真似てみて修得する事柄が多いからである。

和波さんの場合、従来の常識を破ってそれをみごとに克服し、しかも世界のトップクラスに育てたわけで、そのご苦労は大変なものであったと思う。また、孝禧さんのご両親はもとより、次男の幸久さんや恩師の方々との愛情あふれる関係もすばらしいと思った。

ところで盲人の世界的ヴァイオリニストを育てたものが何であったか、失礼をも顧みず分析してみると、つぎの3つに要約されると思う。

- (1) 目標に到達するための階段を本人の能力に合わせて設計する

歌、点字、ピアノ、ヴァイオリン、いずれも容易な段階から、しかも正視者の1段階を5段階にも10段階にも分解して設計している。ヴァイオリンの場合、弓のもち方だけでも盲人にとっては大変なことであったと思う。その盲人という特性に合わせてステップを設計し、1段階ずつ着実に昇るようにしたと言える。

また、演奏会やコンクールにしても、小さなものから大きなものへと順次レベルを上げていったものと拝察する。時には壁にぶつかり設計変更を加えながらのご苦労であったと思う。

- (2) 途中で止められない外的条件を作る

人はいったん志をたてても途中で挫折することがある。人間は止める理由をうまく考えるものである。そうならないように、はやばやと多数の人々に目標を公表したり、恩師と話合ったりしている。

そうなると中断しようにも義理とか面子とかで、やらざるを得なくなってしまうからである。

- (3) 成功に対して心から拍手を送る仲間がいた

たとえ小さな階段であっても、それを1段昇るごとに、それを自分のことのように喜ぶ仲間が必ずいるということだ。それは時には家族であったり、恩師であったり、そういう仲間が多数いるのである。

昔から「叱るより褒める」と言われているが、まったくその通りである。ママゴンが、子供にとっては気の遠くなるような目標を押しつけ、ガミガミ叱ることだけを生き甲斐としているのとはまったく異質のものであると思った。

ところでORワーカーやSEは実戦の中でこそ育つ、と言われていたが、われわれはいったいどうやっているのだろうか。目標や目的を定めて、それをやりとげるための作業を分析してPERTのネットワークなどに組立て、それぞれの工程の担当者を決めていく。これらの計画はチームで討論しながら、お互いの力量をみながらやっている。

それができるとユーザーやスポンサーに提示して作業を開始する。作業の進展に伴って計画を変更することもある。予想しなかった困難に遭遇したり、それをみごとに乗り越えたり、さまざまな経験をしながら一人前の仕事師に育っていく。

作業を割り当てる場合“この人なら少し努力すればこの仕事をこなすだろう”という割り当て方が好ましい。まったく無理と思われる仕事を割り当てたら、本人は最初から逃げ腰になってしまうし、また逆の場合は白けてしまうものである。

また、作業計画はそれに参加する人々のお互いの約束でもある。1つの工程の不手際が全体を失敗に追込むこともある。この関係をお互いに認識していれば、モタモタはしておれないのである。

予期以上の成果を取めた時など慰労会をやったりする。この乾杯というのはタイミングが大切であって、その喜びを忘れた頃に豪華なことをやるよりは、安酒でもその感激の生々しいうちにやったほうがずっと有難味を感じずるものである。このように考えてみると和波さんがおやりになったことは、ORワーカーやSEの養成についても相通ずるものであると思う。

(M. M.)